

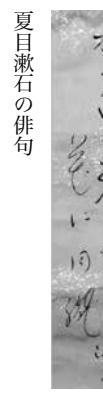
総論 良寛——その生涯と書—— [増補]

小島正芳

一、良寛の書の魅力



夏目漱石の画賛（部分）



夏目漱石の俳句

良寛の書の魅力は、いつたいどこにあるのであろう。その書の魅力はいくつか挙げることができると思われるが、一つは、やはり純な精神、超俗の気品が作品に溢れているところにあるのではなかろうか。夏目漱石は、大正三年（一九一四）一月七日から十二日まで東京朝日新聞に連載した「素人と黒人」という評論の中で、「良寛は嫌いなものの中に、詩人の詩と書家の書を平生から数えてゐた。詩人の詩、書家の書といへば本職という意味から見て是程立派なものはない筈である。それを嫌ふ上人の見地は、黒人の臭を悪む純粹でナーブな素人の品格から出でる。心の純なところ、氣の精なるあたり、そこに摺れ枯らしにならない素人の尊さが潜んでゐる。」と述べている。

良寛の三嫌の話は有名であるが、三嫌とは漱石の挙げている詩人の詩と書家の書、それに膳夫の調食（料理人の料理）といわれている（鈴木文台）。いずれもプロの作品である。専門家はそれが本職であるから、技術の修練も徹底して行われ、見た目もきれいな作品を作る。しかし、漱石はそのような専門家の作品は「玄人の臭氣」があり、人間の真情のこもつてない「摺れ枯らし」の作品が多いと述べているのである。それによると良寛の作品は、それら玄人の作品と較べると精妙さという点では劣る面もあるかもしれないが、その作品には純真で高貴な精神が躍如として、見る人の心をなごませてくれるものがある。漱石が良寛の書を高く評価しているのは、まさにこの純粹でナーブな品格なのであろう（図版No.121）。

この純粹な品格というのは、出そうとして出るものではあるまい。良寛の生き方、生活がそのまま書ににじみ出たものであろう。良寛の書は、長年にわたる坐禅修行によつて、物欲も名利も捨て去り、「真人」として生きた良寛のありのままの姿のあらわれなのである。そこには、澄みきつた精神が溢れている。北大路魯山人は、昭和十三年六月「魅力と親しみと美に優れた良寛の書」（『良寛遺墨』所載）の中で、「良寛様の書

北大路魯山人の「良寛詩」の筆筒



は質からいつても、外貌からいつても、実に稀にみるすばらしい良能の美書であつて、珍しくも、正しい嘘のない姿である。いわゆる真善美を兼ねえたものというべきであろう。書には、必ず人格が反映しているもので、人格が反映していない人格以上の書の生まれ出ることなど、まずもつてあり得ない」と、良寛の書と人格との関わりについて鋭い指摘をしている。やはり、良寛の書のいいところは、良寛という人のいいところの反映なのである。良寛の温かな品格を持つ親しみやすい書は、いつもほほえみをたたえて人々と接し、清貧の生活でも強い精神を持つて、民衆とともに歩んだ良寛の生き方の反映なのである（図版No.136）。

良寛の書の中に見られる芸術性の高さも、見逃すことはできない。変転自在の布置、リズム、点の使い方など章法の巧みさに驚かされる。特に乙子神社時代の円熟した書は、ゆつたりとしたリズムで飄々と単体で右に左にと変化しながら、バランスをとつてまとめ、各行が余白を生かして相互に響きあつて、全体として美しいリズムとハーモニーを醸し出している。そして、これだけ千変万化の妙を見せていても、それが人間の技と思えないほど自然に書かれているのには驚かされる。

良寛は、楷書では陶弘景の『瘦鹤銘』、黃山谷の『廬山七仏偈』、草書では、懐素の『自叙帖』『千字文』、王羲之の法帖『澄清堂帖』、孫過庭の書、尊円親王の『梁園帖』（『梁園宝帖』）、それに張旭、高閑、張芝など の書も学んだことが知られている。また、仮名では小野道風の『秋萩帖』を学んでいる。良寛は、これらの法帖を熱心に学び、古典の書法を体得していく。したがつて、その書は一氣呵成に自由に揮毫しても、けつして上滑りになつたりしてはいけない。良寛の書は、一度書法を手に入れても、それにとらわれず、自由に自分の感性で新たな世界を創造したものといえる。

良寛の最晩年の書の美しさは、まことに絶妙と賞嘆するよりほかにない。その書は、幽玄というか、外へあらわれきれないで、内に無限の含蓄と余韻を秘めた気品の高い精神的な世界であった。天保元年（文政十三年十一月十日より改・一八三〇）十二月二十七日、良寛が亡くなる直前にしたためた山田杜臯宛書簡は（『良寛遺墨集』図版No.127）、消え入るような細い線で、よろめくように書かれている。線も一部ふるえているところも見られる、かなり体力が衰えていることが窺える。しかし、その書は神韻縹渺とした線の妙味があり、とらわれのない無為自然の趣がある。良寛が最晩年に行きついた書境を、そこに見ることができる気がする。

良寛の書は、青年期にやしなつた精神性の高い独自のスタイルに、『自叙帖』や『秋萩帖』など古典の古格を取り入れ、銘酒が発酵するようにゆつくりと完成されていった。良寛の書は、日本書道史上燐然と輝く

